



KWANSEI
GAKUIN
UNIVERSITY



手話言語研究センター講話会

開催日時：2018年12月 9日 13：00～16：00

開催場所：東京国際フォーラム

開催日時：2018年12月12日 15：30～18：00

開催場所：関西学院大学西宮上ヶ原キャンパス

主 催：関西学院大学手話言語研究センター

目 次

開会の辞	2
森本 郁代（関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター副長）	
第一部 講演	3
「ろう者学（Deaf Studies）と文化的対処能力（Cultural Competence）」	
ーろう者を医学的視点ではなく言語文化的視点から捉えるということー	
講師 高山 亨太（ギャロデット大学ソーシャルワーク学部学科長・助教）	
司会 川口 聖（関西学院大学手話言語研究センター専門技術員）	
第二部 対談	20
講師 高山 亨太	
松岡 克尚（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員）	
モデレーター 原 順子（四天王寺大学人文社会学部人間福祉学科教授）	
司会 川口 聖	
閉会の辞	45
川口 聖	
登壇者紹介	46

開会の辞

森本 郁代

○森本 本日はお忙しい中、関西学院大学手話言語研究センター主催の2018年度講話会にお越しくださり、誠にありがとうございました。本センターの副長を務めております森本郁代と申します。

手話言語研究センターは日本財団から助成を受け、2016年に本学に設置され、今年で3年目を迎えます。本センターのミッションは、聴者、ろう者が協働し、手話言語学をテーマとする研究の振興を図ること、そうした研究に従事する研究者を養成すること、研究成果を手話言語使用者及び広く社会に還元すること、そしてその研究成果をもって手話言語の言語としての位置づけを確立し、手話言語に対する社会の理解の促進を図ることです。

本日はアメリカのギャロデット大学ソーシャルワーク学部の学科長で助教の高山亨太先生をお招きし、「ろう者学と文化的対処能力ーろう者を医学的視点ではなく言語文化的視点から捉えるということー」というタイトルでご講演いただきます。

高山先生にお話しいただく前に、まず、私から簡単に高山先生についてご紹介させていただきます。高山先生はろう者、難聴者を支援する専門職のあり方や、精神障害や心理的問題を抱えるろう者、難聴者の支援について長年研究してこられ、日本で精神科ソーシャルワーカー、社会福祉の専門職としてご活躍なさった後、現在、ろう者の教員としてギャロデット大学で教鞭をとっておられます。

このたび、大変お忙しい中、アメリカからはるばる関西学院大学までお越しくださり、先生の長年のご研究及びご実践について貴重なお話をいただけることを大変うれしく思っております。

では、高山先生、どうぞよろしく願いいたします。

【第一部】講演

「ろう者学 (Deaf Studies) と文化的対処能力 (Cultural Competence)」

ーろう者を医学的視点ではなく言語文化的視点から捉えるということー

講師：高山 亨太

司会：川口 聖

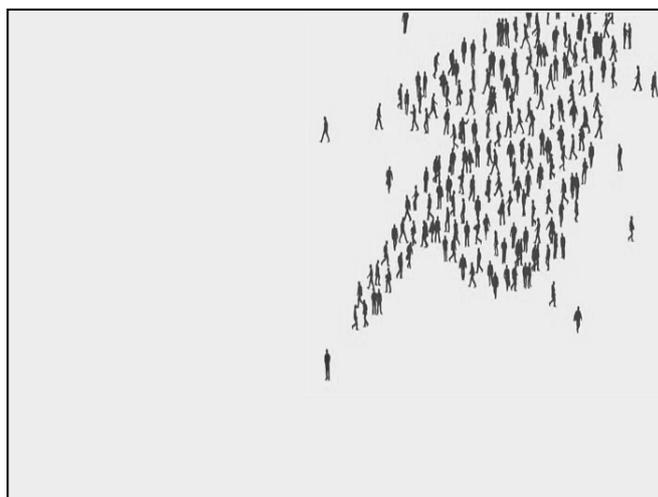
○高山 皆様、こんにちは。高山と申します。よろしくお願ひいたします。本日はお招きいただきましてありがとうございます。

本日のテーマは、「ろう者学と文化的対処能力」です。文化的対処能力という日本語訳もあまりしっくりこないので、今回はカルチュラルコンピテンスという言い方をしようと思います。よろしくお願ひいたします。

私の職場はギャロデット大学というところで、ワシントンD. C. にあります。ワシントンD. C. と言えばホワイトハウスが有名ですが、そこから歩いて20分ぐらいのところにあります。今年、創立154年になる長い歴史のある大学です。関西学院大学は創立130年ぐらいでしょうか。兄弟のような感じですね。そこでソーシャルワークや発達心理学を専門に教えております。

改めて、皆様に想像していただきたいのですが、ろう者、難聴者、親、支援者など色々な立場があるかと思いますが、その中で、ろう者と聴者の文化的差異、あるいは、耳が聞こえないことは障害なのか、聴者との違いとは何だろうかということを考えていただきたいと思います。これが本日の講演テーマの一つになっています。

こちらの絵をご覧になってどう思いますか。何でもいいので言ってみてください。一言で表現してもいいですし、何でも構いません。



○フロア 社会的に言うと、左下の人がろう者で、その他の人が聴者です。

○高山 そうですね、1人のろう者と多数の聴者ということですね。ろう者と聴者だけではありません。1人の障害者と多数の健常者という関係性も言えるかもしれません。あるいは1人の外国人と大多数の日本人という見方もできるかもしれませんね。

左下に1人だけいますよね。これがろう者で、1人だけ手話を使う人間です。あとは音声言語を話す人たちということも言えますけど、大多数の中でたった1人というのはどのような問題が起こるのでしょうか。「聞こえない」だけの問題で済むのでしょうか。

○フロア 悲しい。

○高山 そうですね。そう思うこともあるでしょう。

○フロア 寂しい。

○高山 そうですね。コミュニケーションの問題、また文化をお互いに理解し合えないという寂しさもあるでしょう。孤独感もあるかもしれません。

ここでのポイントは「スティグマ」、この言葉を聞いたことはありますか。福祉や心理の世界ではよく聞き慣れた言葉だと思います。改めて「スティグマ」とは何でしょうか。日本語に変えると色々ありますが、「烙印」とでも言いましょうか。「この人はだめだという烙印を押す」など、烙印という言葉は昔から使われています。江戸時代の罪人や穢多・非人の人たちなど、社会的に烙印を押された人たちは色々存在していたと思います。ろう者に対するスティグマであれば、例えば、ろう者だったら話せない、日本語ができないというような見方をする、そのような大多数者の立場からの見方ですね。ろう者だからだめだ、仕事は途中でやめるなどの烙印を押される、押されやすいわけです。

そうした結果どうなるのでしょうか。寂しいとかつらいという結果だけではなく、精神面でも社会面でも困難が生じて色々な問題が起こってくると思います。これはろう者だけではなく、他の障害者に対しても同じことが言えます。では、改めてスティグマとは何でしょうか。ろう者というのは聞こえないことだけで苦しいのでしょうか。身体的な問題で聞こえないという結果、悩むということが起こるのでしょうか。文化的な違い、生活のルールの違い、言語コミュニケーションの違いからも悩むことがありますよね。

おそらく大多数（マジョリティ）の人たちが、「あなたは聞こえないから無理だな。だめな人間だな。」と持っているのだと思います。マジョリティの人たちは、聞こえて

日本語を話せます。対して、マイノリティのろう者の立場としては、ろう者であり手話があります。ですので、「問題」というよりそれがろう者の「やり方」なのです。もし、双方が対等にできればスティグマというものは減っていくのではないのでしょうか。そのための方法はないかということを考えなければいけないと思います。それがカルチュラルコンピテンスという考え方と繋がるのではないかと思います。そのあたりはギャロデット大学ではきちんと厳しく指導しています。

ろう者と聴者では文化が違います。他にも異文化と呼ばれるものがあります。例えばどのようなものがあると思いますか。外国人もそうですね。日本にいる異文化を持つ人々というのはどういった人たちがいるのでしょうか。多分日本人はそういったことを考える機会がないのではないかと思います。アメリカにいと、黒人もいるしヒスパニックもいるし白人もいるといったように多種多様な文化を持つ人たち、考え方を持つ人たちがいます。日本ではどうでしょうか。

聞こえるか聞こえないかだけで言うと、聞こえる人たちが大多数です。その大多数の中にも様々な異文化が存在しています。例えば北海道地方のアイヌの人たちです。アイヌ人は書き言葉を持ちませんね。口承で文化を伝えていきます。沖縄はどうでしょう。あと日系人もいますね。自分は聞こえるけれども両親がろう者という場合もあります。また、ろうコミュニティの中にも様々なマイノリティと呼ばれる方々がいらっしゃいます。色々な立場があると思います。異文化の人々が抱える問題というのは障害だけではありません。「言葉の障壁、文化・価値・習慣の違い」といった色々な問題があります。「他人とは少し違うらしい」ということの積み重ねが、結果、色々な問題に繋がっていきます。聴覚障害であるという医学的なことだけではなく、様々な要素を理解することが「カルチュラルコンピテンス」と言えるのです。

昔、ろう教育のテキストには、ろう者、聴覚障害者というと、この図に書いてあるような考え方というものが普通に載っていました。はたして、本当でしょうか。マジョリティ、多数の立場から見たろう者、聴覚障害者が描かれているだけではないでしょうか。「聴覚障害者だからこうなのだ」という見方です。でも、実際は違いますよね。一般的なるろう者を知っている人たちから見れば、このようなことは違うということが分かります。

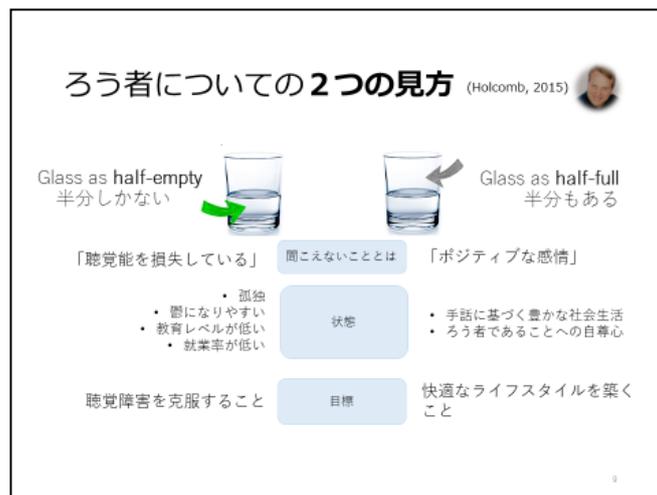
1990年代までの一般的な
聴覚障害教育関連のテキストでの記述

- | | |
|---------|--------|
| • 自己中心的 | • 顕示的 |
| • 利己的 | • 攻撃的 |
| • 依存的 | • 無頓着 |
| • 無責任 | • 非共感的 |

聴覚障害が直接、社会性の問題を引き起こすという
科学的根拠はない
ろう・難聴当事者や専門家からの批判
↓
科学的根拠に基づいた再考、文化的側面からの捉え直し

皆様に質問です。色眼鏡をかけて見ているか試してみたいと思います。今、このペットボトルに水がちょうど半分くらい入っています。これをどう見るかです。「半分もある」と見ますか、「半分しかない」と見ますか。どちらですか。半分もあると見る人、半分しかないと見る人、それはどちらも正しく、間違いというものではありません。

改めて聞きます。半分もある、あるいは半分しかない、なぜそういうふうな見方になるのでしょうか。自分自身の経験からでしょうか。親から教わったり、教育環境であったり、そのようなものを取り込んで自分の価値観というものができていると思います。なぜ「半分もある」というふうに見たのか、あるいは、「半分しかない」というふうに見たのか、考えてみてください。



少しやり方を変えますね。ペットボトルを横にしました。どう見えますか。「半分もある」になりますか。「半分しかない」になりますか。斜めにしてみました。これではどうでしょう。向きを変えたところで水の量は同じですよ。物の見方というのは色々な方向から見るができます。それによって変わっていきます。そういったことを考えることが、残念ながら日本人は少ないのではないかと思います。地域性、民族的な問題かもしれませんが、あまり考える機会に恵まれていないのかなと思います。

話を元に戻します。ろう者についての2つの見方です。有名なろう者学の研究者であるホルコム先生という方が分かりやすく提示してくださっています。先程のペットボトルの「半分しかない」というのは、こちら画面左側の「半分しかない」に書いてあることですね。聴覚障害者についてはマイナスのイメージ、かわいそうだな、残念だなというような考え方です。逆に、「凄い、半分もある」というのは、いわゆるポジティブな感情です。ろう者には手話がある、そのような考え方です。

見ている対象は同じです。おそらく伝統的に、医学的に見ると、「半分しかない」の考え方になるのだと思います、聴覚障害者だから仕事はできない、コミュニケーションがとれないというような見方をする。そして、そこをきっかけに支援が始まったのだらうと思います。逆に、ろう者は手話ができるじゃないか、素晴らしいといったところから支援が始まる。結果はどうなるか分かりませんが、そのような2つの見方があります。

自分自身がろう者になった立場で考えてみてください。どちらの立場のソーシャルワーカーに支援を受けたいですか。皆様だったらどちらの考え方をする人がいいでしょうか。

私が今までろう学校などで受けてきた支援というのは、「半分しかない」という見方です。快適なライフスタイルを築くということはありませんでした。ほとんどのろう者は、「半分しかない」という見方で支援を受けてきたのだらうと思います。現在、ギャロデット大学で教鞭をとっていますが、「半分もある」という考え方です。手話を使って授業をしていますし、それでコミュニケーションによる障壁はありません。どちらの考え方がいいのか改めて見直してほしいと思います。

さて、「ろう」とはどういうことなのか。先程の話と同じようになってしまいましたが、見方によって変わってきます。多数の聴者の専門家から見れば医学モデルに従って「障害」と定義されています。しかし、ろう者自身は、ろうコミュニティの中で文

化を共有し、手話という言語を用いて通じ合っています。見方によって全く違った受け止め方をされるわけです。多数派である聴者から下に見られてしまう。このことがスティグマなわけです。それは、ろう者からすると迷惑な話ですよ。特に日本人は、その違いというものを受けとめることができない、自然と排除してしまう、違うものは受け入れることができないといった歴史的背景があるわけです。

なぜそのような考えが起きてくるのか。カルチュラルコンピテンスを身に付けるには、実はそのプロセスが大事なのです。実際に色眼鏡で見ていると言われるもの、それはどこから来ているのか。その色眼鏡を外し、実際に、客観的に眺めてみるというのはとても大事なことだと思います。色眼鏡をとってみると違った世界が見えてきます。その色眼鏡のほう合わないということになってくるでしょう。

ろう者学・言語的文化的側面というのは、「水が半分もある」という考え方です。対して、聴覚障害学、医学的側面は「水が半分しかない」という考え方です。半分しかない。ではどうすればいいのか。継ぎ足さないといけないというような方向にいきますね。医学で言えば治さなければならない、治療していくという方向性です。水の中にコーラを混ぜるかもしれません。水ではないものを混ぜてしまうかもしれません。そのままにしてしまうかもしれません。

特に日本文化で言えることなのですが、多数派、マジョリティの人たちは、特に共通のこと、お互いが知り得ることを言わない文化を持っています。でも、ろう者ははっきりとさせる、明文化させる、といった文化の違いがあります。この差異によって、誤診など様々な問題が起きてきます。昔あった話ですが、あるろう者が精神科に行った時、そのろう者は、手話はできるが日本語がしっかりと書けないことから、精神的に一般的ではない、知的に遅れていると誤診を受けてしまいました。

ろう者から見れば手話もできるし何ら問題はありませんが、精神科の先生が所属する聴者の文化から見ると、少し普通とは違うような見方をされ、誤診を受けるということもあると思います。それは大多数でつくられた聴こえる社会が中心となっているからですね。それによって様々な障壁、バリアが生まれていきます。その存在を皆様に知っておいてほしいと思います。

先程の話と重複するのですが、マジョリティ側である聴者の中で、ろう者としてしっかり向き合い理解している人というのはほんの一握りだと思います。

皆様の中に、専門職の方もいらっしゃるかもしれませんが、もちろんそうではない方

もいらっしやるでしょう。例えば私は、医学的側面を排除しようと思っていません。言語的、文化的側面というのも必要で、その両面のバランスがとても大事になってきます。

聴者の立場であれば、その「聴者」というのは一体どういうことなのか。生育の中で自分の培ってきたものを見つめ、これが聴者なのだということを理解した上でろう者と向き合っていかなければなりません。「ろう者を理解する」というのは、「コミュニティ」「行動と認知」「価値観」「言語コミュニケーション」など、様々なものが含まれています。ですが、これらを100%理解するのは不可能です。

私自身ろう者ですが、ろう者を全て理解しているというわけではありません。それは逆もしかりですね。聴者だからといって聴者のことを100%理解しているということではありません。お互いに分かる面、分からない面を持っています。

先日、『ソーシャルマジョリティ研究』という本を買いました。多数者についての研究をされたものです。私も少数者なので、そういった少数者から見た多数者の研究という意味で興味深い本でした。カルチュラルコンピテンスというのは少数者を理解するだけでなく、多数者を理解することも大事なことだと思います。

カルチュラルコンピテンスを磨いていくには様々な方法があると思いますが、その方法の一つは、ろう者学を学ぶということです。「ろう者学」という言葉は聞いたことがありますか。日本では最近、「手話言語学」が盛り上がってきていますが、「ろう者学」というのも大事な学問です。アメリカやヨーロッパなどではポピュラーな考え方で、1970～1980年頃始まった1つの学問領域です。

きっかけの一つは、黒人学などの他学問領域の台頭です。黒人文化を研究する学問が黒人学です。他には女性学があります。女性が抑圧された歴史など、そのような心理的なものを研究する学問です。同様にろう者についての学問を研究していくのが「ろう者学」です。まだ研究が始まって40年ぐらしか経っていませんが、これからもっともっと大きくなっていくと思います。日本ではまだまだ取り上げられていないものなので、「ろう者学」という名称自体がまだ広がっていないと思います。

少し中身についてお話しします。皆様、「デフジョーク」という言葉をご存知ですか。この「デフジョーク」というのも研究の一部となっています。文学という面ですね。ろう者の絵画を研究しているものもあります。ろう者が抑圧されたもの、それはどこから来ているのかという心理的な研究もあります。このようにろう者に関する研究は

多岐にわたっています。

ただ、残念ながら、ろう者学という学問は、アメリカ、ヨーロッパで発展していることから、依然として白人の考えが強いですね。それをそのまま日本に取り入れるというのは難しい面が出てくると思います。日本なりのろう者学というのが必要になってきます。

異文化のお話を少ししましたが、ろう者とマイノリティを比較すると、3つほど違いがあります。例えば、黒人、女性、ヒスパニックなど、様々な文化があります。日本ですと、琉球やアイヌなどの文化もありますね。それと、ろうコミュニティ、ろう文化を比べると違う面が3つあります。

例えば、アイヌ人の場合は、アイヌ人として生まれてきました。でも、病気とは見られませんね。または、黒人も、黒人として生まれてくることを病気だとは捉えられません。でも、ろう者の場合には、やはり病気や障害として捉えられ、聞こえないということを残念がられます。リハビリを受けないといけないというような形で病理学的に捉えられてしまいます。

続いて、例えば両親が黒人だったとします。もちろん子供も黒人です。遺伝子上、そうなります。両親がろう者でも、生まれてきた子はろう者とは限らないですね。ろうの親からろう者が生まれるのは10%以下とされています。両親がろう者でも生まれてくるのは聞こえる子供のほうが多いです。

3つ目は「ろうコミュニティが、マジョリティの言語による二重の言語的抑圧を受ける」ということです。

アイヌ人を例に取り上げましょう。アイヌ人は聞こえますね。なので、アイヌ語を習得するという部分では抑圧を受けるかもしれませんが、日本人として日本語を習得することには、問題はありません。一方、ろう者の場合は困難なことが2つあります。

1つは、日本語を使う機会をもつことが困難です。周りが音声で日本語を話しているとその輪に入ることができません。

そして、もう1つは、自分が手話を使って生きていくことの困難さです。今、ろう学校では手話は使えるのでしょうか、「国語」として、自由に手話は認められているのでしょうか。まだですね。これが他の異文化を持つ人たちと異なる面です。

このろう者学、いつから始まったのかということですが、先程、お話ししましたが、歴史としてはまだまだ浅い学問です。日本で言うと、ろう歴史など個人で研究されて

いる方もいらっしゃると思いますが、筑波技術大学で少し研究が始まったというぐらいでしょうか。

ろう者学の理論について全てお話することは難しいのですが、学問の下地となるのは理論です。もし興味がありましたら、日本語で書かれてあるものは少ないですが、書籍を読んだりインターネットで調べてみてください。

さて、ろう者学とは何かというお話をしました。続いては、カルチュラルコンピテンスについてです。なかなか日本語訳することが難しいのですが、「異文化などの知識を実践に反映させる力」というような言い方になります。専門職の人、特にソーシャルワーカーや心理を専門としている人たちは、カルチュラルコンピテンスが大事だ、ということをよく言われます。ですが、専門職に限らず一般的にもそれは大事なことだと思われま

カルチュラル・コンピテンス（文化的対応能力）とは？

- 異文化間の支援場面において効果的に対応できる能力（NASW）
- 「文化」とは、人の集団がもつ独自の生活様式と共有された価値観、信念、意味をさす（AASW）
- 「力量」とは、ある特定の実践場面において効果的に対応できる能力（NASW）

これがカルチュラルコンピテンスの定義です。NASW（全米ソーシャルワーカー協会）で言われている考え方です。ソーシャルワーカーの立場として、今、このような考え方が広まっています。アメリカでは当たり前の考え方ですね。特に、私がいるギャロデット大学のソーシャルワーク学部の中では、カルチュラルコンピテンスとろう者学をリンクさせてディスカッションを行っています。異文化というのか、多数の文化というのか、少し言い方が分かりませんが、異文化が互いに影響し合い助け合っているところにソーシャルワーカーがいるのです。

石河久美子先生という、日本でごくわずかな多文化ソーシャルワーカーを研究している方がいらっしゃいます。今は、日本福祉大学にいらっしゃるとは思いますが、ソーシャルワーカーには、2つのタイプがいるとおっしゃっています。

1つは、自身がろう者、またはコーダ（両親がろう者で、子供が聞こえるという立場の人）であり、常に、ろうコミュニティの中にいるため、日常的に手話をするのが当たり前である、そういう人たちがソーシャルワーカーとして活動しているというタイプです。

2つ目のタイプは、何らかの機会の手話を学んだ方、または、手話はできないけれどろう者に精通している方です。現実的に考えると、1つ目のタイプよりも、2つ目のタイプのほうが多くいます。もし、皆様が支援を受けるとしたら、どちらのタイプのほうがよろしいですか。

なかなか難しいかもしれませんが、分かりやすい例を取り上げます。皆様は日本人ですね。同じ日本人から支援を受けたいか、アメリカ人から支援を受けるほうがいいですか。同じ言語、同じ文化の人から支援を受けたいと考えるほうが自然ではないでしょうか。

他の例で言うと、私は東京で生まれ育ったので関西弁は使えません。関西の文化もよく分かりません。大阪の文化、京都の文化、兵庫の文化、奈良の文化、様々あると思うのですが、私からすると同じ関西だと思ってしまいます。でも、大阪の人から見ると神戸の人とは違うというように異文化だと捉えているのです。

ということから、もし自分が悩んだときに、私のような異文化の人に支援されたいですか。例えば、皆様が赤味噌でも私は白味噌、皆様がお好み焼きだったら、私はもんじゃ焼き、というように食文化も違ってきます。

しかし、大きく捉えると同じ日本人です。ただ、住んでいるところ、そこで培ってきた文化が違っているのです。もちろん、その中で合わないこともたくさん出てくるとは思います。友達としてなら何ら問題ないことですが、専門職になると、そこが逆に苦しくなる場所だとも思います。このあたりを考えていただきたいとします。

ろう者と難聴者を比較してみると、様々な点が異なります。例えば、ろう者は手話を使って生きることを望んでいます、難聴者の場合は、音声で情報を得たい人が多いのです。このように、同じ聴覚障害者と言ってもろう者と難聴者では異なります。



こちらのスライドですが、左側は従来から言われていた古いタイプの福祉のあり方ですね。今もこういう考え方がまだ根強く残っているかもしれませんが、聞こえに特化した支援をする、補聴器を使うなどの伝統的な聴覚障害者に対する支援ですね。

対して右側はろう者から見た立場です。ろう者からすると日本語の大切さは分かっているけれど、手話を使えばいいですし、それが自然なろう者のあり方なのです。先程のペットボトルの例えもそうですね。この半分でいいのです。この発想の転換が大事になってくるのではないかと思います。

カルチュラルコンピテンスについて非常に著名な学者のグリーン先生が、文化的理解の5要素を述べられました。お互いの文化の違いをしっかりと認めること、また自分自身の限界に気づくこと、関心を持つこと、それが非常に大切だと言われています。また、例えばクライアントがろう者だと、そのろう者から学ぼうとする姿勢、それと文化的な資源を活用すること、聞こえる人たちでも色々な制度や資源があります。

ただ、その資源が必ずしもクライアントにマッチするかというと、そうではない時も多々あります。その時には、やはりエンパワーメントでろう者の持っている力を活用することです。

そして最後に、多様性と結びつくことです。例えばジェンダーの問題や、LGBTの問題もあります。お互いが多様性を認め合うことが大事です。ろう者はろう者なりのやり方や、これまで培ってきたものがあります。それを無理にマジョリティの聴者側に合わせるのではなくて、マジョリティがマイノリティに合わせるようになればいいのではないかと思います。日本においてはなかなかそれを学べる機会がありません。

ん。そこが専門性、ソーシャルワーカーに問われている今後の課題ではないかと思えます。

私自身の経験や色々な人から聞いたことをまとめたものをお話します。例えば、聞こえる人の文化ですと、特に日本人はなかなか目を合わせて話すということがないと思うのですが、私自身ろう者ですので、クライアントと話すときは必ず視線を合わせます。しかし、ずっと相手を直視するわけではありません。自然なアイコンタクトを習得しています。これもろう者なりのコンピテンスだと思います。

現在、若いう者、難聴者の中でソーシャルワーカーや専門職を目指す人が、かなり増えてきました。聞こえる人だから持っているもの、聞こえない人だから持っているものがあり、それぞれ持っているものが違います。その中でろう者として専門職についた時のメリットとしては、クライアントがろう者の場合、その当事者の悩みや苦しみの、表面的なものではなくて内面的なものを共感できるということです。それは同じろう者の専門職としての有益性がありますよね。

また、ろう者のために頑張ってやろうと、支援しようとするコミットメント、お互いろう者同士だからこそ出来るものがあると思います。例えば、聞こえるソーシャルワーカーだと、ろう者の支援で途中疲れてしまうようなこともあるかもしれません。そして信頼関係を築く上でクライアントからすると、自分が信じてくれる人がろう者だというだけで信頼関係が築きやすくなるということもあると思います。

例えば、私がもし聴者のソーシャルワーカーだったとすると、ろう者からしたらもう自己紹介の時点で、ちょっとこの人には相談できないなと思う人もいるかもしれません。対して、ろう者のソーシャルワーカーとは自然なやりとりが最初から可能です。

このようにクライアントから、どのような人からの支援を受けたいのかということになりますが、決して聞こえるソーシャルワーカーがだめだと言っているわけではありません。聞こえるソーシャルワーカーもとても大切です。ですので、ろう者のやり方を聴者のソーシャルワーカーに分かっていただくことが必要なのです。もちろん、ろう者のソーシャルワーカーに対しての指導も必要です。

ろう者だからできること、というのはたくさんありますよね。クライアントがろう者の場合に色々なことが推測できますし、自分も同じような経験をしている可能性も多々あります。先程、ろう者学には様々な理論や学問があるとお伝えしましたが、その中の1つで「オーディズム」、これは「聴能至上主義」と言われますが、ここで1つ

紹介したいと思います。

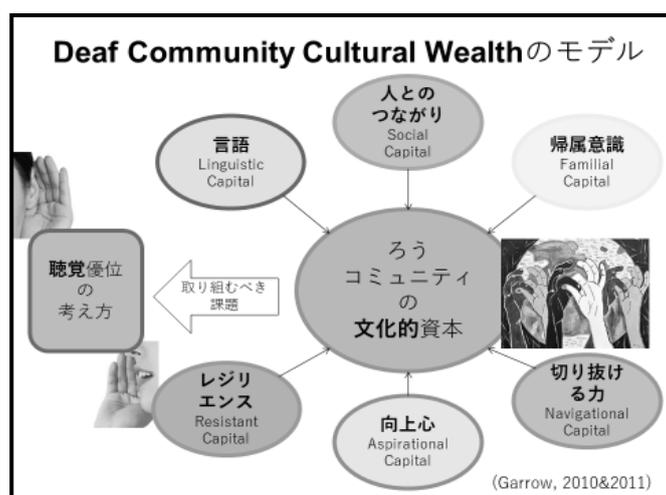
皆様ももしかしたら「聴能至上主義」という考えが少し頭にあるかもしれません。私自身も、今も少し頭に残っているかもしれません。私は生まれてからずっと難聴者として生きてきまして、手話を習得したのは18歳になってからです。それまではずっと声を使って話して、手話とも出会っていませんでした。つまり、生きていく上で日本語を話せるとか書いたり読んだりするということ、聴者みたいになるということが大切だと思ってずっと育ってきました。

でも、その後、ろう者と知り合って、例えばメールなど文書のやりとりをすると、日本語が得意でない方たちもいて、やはり少しろう者を下に見ていたような部分が正直昔はありました。ですが、ろう者の生育環境を知った後、これがろう者の自然な姿なのだと思います。今では対等な立場であると思っています。皆様の中でも、もしかしたらそういう方が少しはおられるかもしれませんが、カルチュラルコンピテンス、つまり異文化を理解するというのは、色眼鏡を外して自分を改めて見つめ直すことが大切なことになります。

最後に一緒に考えていただきたいことがあります。カルチュラルコンピテンスを身につけ、ろう者をしっかりと理解するためにはどうすればいいのかということです。アメリカに、黒人文化や黒人コミュニティについての研究をされているヨッソ先生がいます。ろう者とは関係ない先生ですが、ヨッソ先生の論文から少し引用させていただきたいと思います。

黒人というのは文化的少数者です。ですが、その資源や制度が足りないのではなくて、自分たちの先人から色々と受け継いできた黒人なりの財産がある、という考えを持っています。決して白人に頼らなくても黒人のコミュニティで完結するような力はしっかりあるという見方ですね。

その先生の理論をろう者学に応用して図にしたものがこちらです。マイノリティの集団の中で、先人から受け継いできたものを6つに分類化しました。まずは言語です。次に人との繋がりです。次に帰属意識、自分の居場所とでもいいでしょうか、それと困難が生じたときにその障壁を切り抜ける力です。また、もっと自分を高めたいという向上心。最後に、色々な抑圧など虐げられてきたものに負けないレジリエンスです。この6つの見方についてもっと議論を深めていくと、マジョリティである聴覚優位の考え方を打破できるのではないかということです。



例えば以前、学生たちにホームレスについて議論させたことがあります。日本もホームレスは問題になっていると思いますが、ホームレスも社会的に見ればマイノリティですよね。少数者だと言えます。つまり多数派の家がある人たちから見ると、目障りな人たちのように映るかもしれません。

しかし、ホームレスにはホームレスなりの生き方があるのですね。ホームレスの人たちだけが持っているもの、またホームレスの人たちだけが共有しているもの、例えば習慣やルール、生き方、やり方があったりします。また、ホームレスの内輪だけでの色々な情報交換があって、ホームレスの人たちだけで支え合ったりする面もあります。ですので、この6つの見方は、様々な立場の人に応用できるのです。

言語で言いますと、バイリンガルというのはろう者でいうと、手話と読み書きの日本語力になります。それをどのように習得し使っていくのかということになります。人との繋がりと言いますと、ろうコミュニティのネットワークをどのように使っていくのか、また同じ文化を共有しているろう者同士の、ろうのコミュニティの文化的知識をどれだけ持っておくか。そして制度を活用するスキルですね。

ろう児たちにとってロールモデルとなるようなろう者が、将来への希望に繋がります。差別に負けないことです。1人ではなかなかできないことでも、ろう者集団で乗り越えていこうとする。また色々な知恵を出し合って壁を壊していく、そのような文化的な資本が、ろうのコミュニティにはしっかりと存在していると言えます。

もしそれが小さくて弱いものであればすぐに崩れ落ちてしまいますよね。本日のテーマはカルチュラルコンピテンスです。専門職の人たちが必要なスキルは何なのかを議

論していくことが大切です。それはろう者だけではなく、耳の聞こえるソーシャルワーカーや通訳者など色々な人たちが議論をすることで、何かしらのヒントが見つかると思います。

最後になりますが、「その国の高齢者の状態を見ると、その国の文化の状況が分かる」とイギリスの元首相チャーチルは言いました。この言葉に私は非常に感銘を受けました。高齢の方がしっかりと幸せに生きておられるとすると、その国は豊かなのだと思います。

日本のろうの高齢者は幸せでしょうか。幸せに生きている方はたくさんおられると思います。例えば、聞こえる高齢者ばかりの老人ホームに、ろうの高齢者が入って楽しめますか。また、介護保険のデイサービスなど、ろう者が集まれる場所はあるのでしょうか。地域で豊かな生活を送れるような社会資源があるのでしょうか、病院があるのでしょうか。チャーチルはその国の高齢者の暮らしを見ると、その国の裕福さが分かれると述べたのです。改めて周りの、ろうの高齢者を見てみて下さい。

ご清聴ありがとうございました。

○川口 高山先生、ありがとうございました。

それでは、質疑応答の時間に移りたいと思います。質問のある方は挙手をお願いします。

○質問者 最後の「ろうコミュニティの文化的資本」のモデルについて質問いたします。

今、地域の様子を見ると、ろうコミュニティというものが必ずしもきちっと成り立っていないように思います。例えば、あるろう者がろうコミュニティに入りたがらない、そのろうコミュニティを当事者が敬遠するということがあるようです。ですので、ご提示いただいたモデル以前に、ろうコミュニティの成立自体の根本に関わる問題があるのかと思います。その場合にどのように対処していけばいいのか教えてください。

○高山 100%の十分なお答えはできませんが、やはりアメリカにも同様の状況は、もちろんあると思います。都会だから大丈夫ということではなく、地域によって様々な状況があると思います。例えば、携帯が使えるようになって、人と会うということも減りましたよね。そういった状況の中で、このモデルにある6つの要素というのが非常に大事だと思います。やはり状況に合わせて、テーマによって、人が集まるということがあると思います。

例えば、ろうのソーシャルワークとして成功するために何が必要かという授業をし

たときに、この6つの要素を例にディスカッションしました。例えば、ろうの高齢者の問題について話したいというテーマに集まる人はいるでしょう。そういう興味がある人でこれらを話し合う。身近なテーマを設けて、そこで集まることをすればいいのではないかと思います。

やはりろう者でもろうコミュニティから遠ざかりたいという人もいますが、こういったテーマごとの取り組みを行っていく、発信していくことで、そのろう者もろうコミュニティに近づいてきてくれるかもしれません。是非、試してみてください。

○川口 ありがとうございます。他の方、いかがでしょうか。

○質問者 会社を経営している関係で、当然、聴者とのやりとりも非常に多いです。そのときに困っていることがあります。私がろう者で相手が聴者で、それぞれの言葉を持っているのですが、私は聴者の言葉を、「アウトサイダー言語」、ろう者の言葉を、「インサイダー言語」と呼んでいます。

例えば、別の例で言うと、私は男性ですが、相手が女性の場合、女性はアウトサイダーということになります。ですので、男性の苦しみをそのまま女性に説明してもあまり理解してもらえないということがあります。そこで、女性が理解しやすいような例に置き換えて理解を得るように努力をするわけです。ただ、そうするとなかなか言葉に本質が伴っていきません。聴者とのやり取りの中で、そのような歯がゆい気持ちに日々苛まれています。

カウンセリングをするときにも、先程のお話にもありましたが、ろう者より聴者のカウンセラーの方がいいということもあれば、反対にろう者同士だから、そんなに説明をしなくても、一言言えばお互いにすぐに通じ合えるということもあると思います。それと似たような問題が、私はいつも聴者と対峙してあるのです。ろう者が聴者に分かってもらえるように言葉を選んで話をしても、言いたいことの本質とは距離があり、なかなか理解してもらえないということがあります。

このような問題についてアメリカではどのように対処しているのか、そのご経験を、技術といった面で捉えてもいいのかもしれませんが、教えていただければと思います。

○高山 難しい質問でしたね。レベルの高いご質問、ありがとうございます。おっしゃりたいことはよく分かりました。

アメリカだから事例があるということではないのですけれども、やはり場所作りが大切です。例えば、10月に「手話のスターボックス」が新しくオープンしました。聴者

に話すより自分で経験してもらったほうが早いわけですね。経験を積み重ねてもらふということが大事だと思います。

そのスターバックスは、ギャロデット大学のすぐ近くにあるのですが、ろう者のためというよりは地域のためにあるわけです。当然、多くのろう者がお店に行きます。聞こえるお客さんも行きます。そして、お店の人と手話でやりとりをしたり、お客として来た友達と手話で話したりします。前に聴者が座ることもあります。手話ができない人だったら筆談することもあります。筆談で話しかけてくるので聞いてみたら、ろう者に対して興味があつたりするわけです。

また、お店の雰囲気がいいと言うので理由を聞くと、「ここのお店はろう者が中心だから、BGMが流れておらず静かがいい。」と言います。聴者同士でも音声で話すこともほとんどありません。だから、何か物が当たる音とか人の足音がするだけです。かえってそのほうが居心地がいいと言うのです。そういうところで通じ合うところがあると思います。このようなろう者が自由に過ごせる場所が増えてきていると思います。

また、ろう者の経営するビール工場もあります。大学から車で10分ぐらい行った所に新しくできました。店ではビールも飲めますし、また、それがおいしいのです。これも地域の人に開かれた場所です。聴者も自然にそこに足を運ぶようになっていきます。

やはり、自然にお互いが話せるというのがいいですね。「こういうルールを決めて、こういうふうに合わせてなければいけない」ということではなく、ただそこにあるもの、同じテーマ、その中身に興味をもって集まるということがお互いの理解に通じるのだと思います。アメリカにはそういった場所があり、人の集まる場所にコミュニケーションが生まれてくるという考え方をもっています。そのような例が多く見られるようになりました。

お答えになっていないかもしれませんが、よろしいでしょうか。

○川口 高山先生、ありがとうございました。

【第二部】対談

講師：高山 亨太

松岡 克尚

モデレーター：原 順子

司会：川口 聖

○川口 それでは第二部の対談を始めたいと思います。

ご登壇いただきます3名の先生方をご紹介いたします。まず、先程、ご講演いただきましたギャロデット大学ソーシャルワーク学部の学科長であり助教でおられます高山亨太先生です。そして、関西学院大学人間福祉学部教授であり、手話言語研究センター研究員の松岡克尚先生です。最後に、モデレーターとして、四天王寺大学人文社会学部人間福祉学科の教授でおられます原順子先生です。それではよろしくお願いたします。

○原 皆様、こんにちは。今から対談を始めたいと思います。

私はモデレーターという役割を担います四天王寺大学の原と申します。皆様はモデレーターという言葉は聞いたことあるでしょうか。モデレーターとは、簡単に言いますと進行役なのですが、進行役だけではなく、話が佳境に入ってきますと、その調整をしたり、話がそれそうになりましたら元に戻すといった役割があるようです。

まず、簡単に私の自己紹介をさせていただきます。私は、先程ご紹介いただきましたように、四天王寺大学で社会福祉士、精神保健福祉士、ソーシャルワーカーの養成をしております。そして、聞こえない方たちへのソーシャルワークを研究領域としております。

皆様は、「日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会」という専門職の団体をご存知でしょうか。どのような団体かと申しますと、聞こえない方たちへ相談支援、ソーシャルワークを行っている社会福祉士、精神保健福祉士の国家資格を持った人たちの専門職団体であります。会員数は100名を少し超えるぐらいで、小さい組織なのですが、高山先生も、以前、日本におられたときは理事をされていました。そのような関係で、本日、モデレーターという役割を担わせていただくことになりました。よろしくお願いたします。

対談の進め方ですけれども、先程、高山先生の素晴らしいご講演がありました。その

内容について、松岡先生と私から高山先生に質問をさせていただく予定にしております。最後には、フロアの皆様方からの質問を受ける時間もとっておりますので、そのときには活発に質問していただけたらと思います。

では、松岡先生、自己紹介をお願いいたします。

○松岡 皆様、こんにちは。松岡と申します。どうぞよろしくをお願いいたします。

私はろうではなくて難聴になります。身体障害者手帳の4級を持っていて、両耳ともに85デシベルぐらいの聴力になります。小さい時からいわゆる普通校に通っていたので、手話に関わる機会はなく、手話は「私の名前は松岡です」というレベルの力しかありません。そのようなことなので、本日は口話でお話をさせていただこうと思っています。

専門はソーシャルワークです。皆様の中にソーシャルワークを専門にされている方はいらっしゃいますか。今からお話することは、あまり聞きなじみがないかと思いますが、昨今、福祉の世界では「地域包括ケアシステム」が強調されておりまして、地域の中で、包括的にケアやサポートを受けることが出来るシステムというのをつくっていかないといけないというものです。これは、高齢者であっても児童であっても障害者であっても、また障害の種別に関係なく住んでいる場所、地域でケア、サポートしていこう、支えていこうというものであり、当然、その中には色々な専門職も同時に関わり、更に、地域の人たちにも協力をしてもらうというシステムで、それをこれから築かないといけないということがしきりに言われています。

そうすると、様々な専門職、様々な人たちが同時に連携しながら関わってきますので、当然、様々な価値観がそこに交差することになります。専門職ごとの価値観の違い、地域の人たちそれぞれの価値観、また、地域の中には外国の方や障害をお持ちの方もいらっしゃるかもしれません。そういう意味では、非常に価値観が多様な人たちと同時に関わっていかねばいけないという状況にこれからなっていくだろうと言われてしています。

現に、先日、国会で入管法が改正され、日本も実質的に、いずれは本格的な移民社会になるのではないかということが言われています。そのような状況を考えますと、ソーシャルワーカーがどう支援をし、クライアントと呼ばれている人と関わっていくかということを考えるにあたり、先程も言ったように、色々な価値観が混ざっている地域社会を相手にしていかなければいけないという中で、本日の高山先生のお話のろう

文化というところも、この価値認識に関わる問題ですので、とても勉強になりました。地域包括ケアシステムの中では、ろう文化や手話も大きなテーマとして考えていかなければいけないと思われました。

先程のご講演の中で、ろう者学やろう文化、カルチュラルコンピテンスという言葉が出てまいりましたが、おそらく皆様も同じような疑問や質問など、それらに感じていらっしゃるかもしれませんので、僭越ですが私がいわば皆様に代わって少しお話をさせていただきます、それで本日の高山先生のご講演について、より理解を深めていけたらと思っています。よろしくお願いします。

では、私からの最初の質問です。ろう文化とかろうコミュニティという言葉が出てまいりましたが、その範囲についてです。メンバーシップ、つまりどういう人たちがろう文化とかろうコミュニティのメンバーなのか、あるいはメンバーではないのか、というところが少しはっきりしなかったように思いますので、教えていただけたらと思います。

○高山 ありがとうございます。

アメリカでも日本でも、ろうコミュニティの一員というのはどのような人を指すのかというのはずっと議論が交わされています。30年ぐらい前の1980年に、コクリー先生とベイカー先生という非常に著名な先生方が、ろうコミュニティのメンバーというのはろう者だけではなく、ろう者だけでそのメンバーを完成させることは非常に難しいと述べられ、4つの分類化された定義がなされました。

まずはろう者、当事者はもちろんそうですし、難聴者もそうです。それは聴力的な見方と言えます。

2つ目は政治的な見方です。例えば、ろう運動に関わっている人が入ります。手話サークルのサークル員や、例えば、今、日本でも旧優生保護法の関係で訴訟が起こっていますが、その中にもろう者がいると思うのですが、その裁判に関わっている弁護士の聞こえる先生は、たとえ手話ができなくてもろうコミュニティのメンバーと言えらると思います。

3つ目が、社会的な見方です。例えば、両親がろう者で聞こえる子供、コーダと言いますが、そのコーダもろうコミュニティの一員と言えます。

最後の4つ目は、言語的な見方です。手話を使う人がそうです。この4つに分類化されたものが定義されたのですが、これがろうコミュニティのメンバーを構成している

と述べました。今でもアメリカではその考えに共感を持つ人が多いようです。

そこで大事になってくるのは、やはりろうコミュニティのルールや価値観をしっかりと共有できているかというところですね。手話ができる、できないは、さほど関係ありません。価値観をお互いしっかりと共有し、尊重し合える人がろうコミュニティのメンバーと言えると思います。

○松岡 ありがとうございます。ということは、アメリカでもろう文化やろうコミュニティというもののメンバーシップの考え方には、様々な考え方があるという理解でよろしいですか。

○高山 そうですね。

○松岡 日本では、「ろう文化宣言」などを見てもみると、先程、高山先生が挙げてくださった4つの基準の中の「言語学的な見方」というところがやはり強調されて、手話を使える人がろう文化のコミュニティなのだというような捉えられ方が強くされる傾向があるのではないかと思います。そうすると、逆に手話通訳の方がろう文化に入ってくるのか入ってこないのか、それからろうの中でも腕がない人は手話ができないのでどうするのかなど、そのような問題も起こってくるわけです。でも、多様な捉え方があるという、そのような理解をしたほうがいいということですよ。

○高山 はい、そうです。

○松岡 次の質問に移らせていただいてよろしいですか。

○高山 はい。

○松岡 もしかしたら、これは私だけの理解なのかもしれませんが、ろう文化といった場合は、その反対に聞こえる人の文化というのが暗黙の上に想定されているような気がします。例えば、私は障害学を専門にしていますが、障害学の中でディスエイブリズム、つまり、その社会の中で障害者と言われる人たちがどういうふうに扱われて、どういうふうに排除されてきているかということを調べる研究があります。その反対がエイブリズム、すなわち「できる」ことを優先し、重視する考え方です。つまり、ディスエイブリズム（できない）と言うと、逆にエイブリズム（できる）ということがその反対に存在しており、ちょうど両者は鏡みたいな関係になっているのではないかと思います。つまり、聞こえない人の文化ということは、言い替えると当然、反対に聞こえる人の文化というものが暗黙に提示されており、両者の比較によって、ろう文化を知ることは逆に聞こえない人の文化の特徴などが浮かび上がってくる、そんな

イメージを持ちました。

そうなった場合、例えば、西洋の人が東洋を指して、オリエントという言葉をよく使いますが、オリエントがあって初めて自分たちの西洋（オクシデント）が浮かび上がってくるということが言われています。ですが、オリエントと言っても実は非常に様々ですよ。トルコもインドも中国も日本も全部、オリエント・東洋です。それが全部十把一絡げにされて「オリエント」というように西洋から見られ、そして西洋はそれを自分とは異なる存在としてイメージし、それによって逆に西洋が自分たちのアイデンティティを獲得し、「自分たちは東洋と違うのだ、西洋は東洋より優れているから東洋を支配してもいいのだ」というような考え方が生まれたのではないかとされています。

ここまでで何が言いたいかと言いますと、要はろう文化について、当然その反対として聞こえる人の文化というものが暗黙の上に想定されているのではないかとということです。先程の東洋、西洋の考え方でいくと、ちょうど西洋の人たちが、「自分たちは東洋を支配してもいいのだ」という理屈とは逆のこと「自分たちは支配されているのだ」という発想が起こっているのではないかと思うのです。つまり、自分たちが聞こえる人たちから抑圧されている、支配されている、それを浮かび上がらせるために、逆に聞こえる人の文化というものを暗黙の上に想定して、そしてそれを「オーディズム」として捉えているのではないかと思うのです。

もしそのような考え方が成り立つとすれば、先程も言いましたように、東洋と言っても様々ですが、西洋の人たちは東洋の人たちがそれを全部一括りにしたということになります。インディアンという言葉もそうですよね。私たち「インディアン」とよく言いますが、インディアンの人たちにも色々な部族があり、それぞれ違う文化を持っていますよね。それを十把一絡げに「インディアン」と括り、そして、「彼らは劣っているから、当然それを支配してもいいのだ」というような考え方が出てきたということがあります。同じことは、ろう文化の対比としての暗黙の聞こえる文化への見方にも起こっているのではないか。ろう者としてのアイデンティティ形成のツールとして聞こえる文化の暗示的対比、それもステレオタイプのそれが求められているのではないか。

つまり、簡単にいえば、聞こえる文化を単純化していないかということになると思います。聞こえるという文化にも、実は色々なものがあるのではないかという疑問を少

し持ちましたので聞かせていただきました。

○高山 非常に難しいご質問をいただきましてありがとうございます。

今の松岡先生のご質問は、非常に示唆に富むものだったと思うのですが、ろう者学に関する数々の議論の中の一つに、「セントラリズム」という言葉がありまして、これはろう者が自分を中心として周りがあり、全て自分が正しいという思いをもとに成り立つというような考え方です。

それは逆に聞こえる人にもあるでしょうし、白人にも言えることだと思います。そのセントラリズムの弊害といいますのは、ろうコミュニティと言っても実際一つではないということです。色々なろう者がいます。それは白人でもそうですし、高齢者、LGBT、アジア人でもそうです。一括りにはなかなかできません。

しかし、そのセントラリズムというと、同じ人は受け入れられ、違う人は排除する、という問題がろう者間で起こっています。ですので、聴者に対しても自分と合わなければ排除してしまうのです。結果として、聞こえる人たちも異質なものとして排除することに繋がっていきます。同様のことが歴史的に見て少数者集団（マイノリティ）では往々にしてみられます。コミュニティが求心力を持つために、そういった問題が起きてくるわけです。

黒人もそうです。公民権運動が1960年代にありましたが、選挙権もなく、バスに乗っても白人と一緒に隣に座れないなど、色々な抑圧を受けていた部分がありました。それが、やっとそこから解放されまして黒人が力を得ました。当時、黒人は「ニグロ」と言われていました。それは白人がつくった言葉でしたので、黒人の中で大きな反発がありました。「アフリカ系アメリカ人」と言ってほしいという人もいて、そこで摩擦が起こっていました。

それが1990年代に入りますと、「アフリカ系アメリカ人」という言葉に抵抗を持つ人たちが多く出だしました。「ブラック」という言葉を使ってほしいという主張が出始めたのです。それに対する反発もまたあつたりして、そのうち「ブラック」という言葉に落ち着いてくるのです。歴史的にみても少数者集団の中で少数者が力を持っている、ということは、セントラリズムの視点からみても至極当然のことかと思えます。

○原 ありがとうございます。松岡先生、いかがでしょうか。お聞きしたかったことだったでしょうか。

○松岡 はい、とても。ありがとうございました。

ろう者学が誕生してまだ30年ぐらいの歴史しかないということでしたし、しかも、おそらくアメリカの白人社会の中で生まれた学問だということも理解できましたので、そういう意味では、まだまだ発展の余地があるだろうし、これから変わっていかなければいけないのだろうなということもよく理解できました。

やはり先程の西洋と東洋の比喻でいくと、東洋の多様性というのも、また、私たちがこれから学んでいかなければならないし、当然西洋も多様ですよ。言い替えると、ろう文化も聞こえる文化もいずれともに実は多様であるはずなのです。

そのろう文化の多様性もまた、これから学問的に深めていかなければならないと思うし、当然、その反面として聞こえる人たちの文化というものを更に研究していく必要があるのではないかと思います。ちょうど女性学が発展していく途中で男性学が発展していったということと同じように、ろう者学を考えていって、ろう文化の、ろうコミュニティの多様性を学んでいくと同時に、聞こえる人の文化学というべきものでしょうか、そこもまた、発展させていっていただけたらありがたいかなと思いました。

○原 高山先生、いかがですか。

○高山 現在、多くの研究者が、ろう者学に携わっていますが、その多くは白人の人たちです。ですので、それに対する反発も所々にあつたりします。それも学問的には自然な流れだと思います。色々な反発が出ることも自然なことですし、今後もっともっと、ろう者学が発展していくのではないかと思います。

○原 色々なお話が出ておりますが、日本とアメリカを比べても本当に色々な違いがたくさんありますよね。今出てきたお話の中でも、ろう者といっても色々な人たちがいらっしやるのだ、多様な文化を背景とする方たちもいらっしやるのだということですよ。なかなか日本ではこの辺の感覚は理解するのが難しい、と皆様思われないうか。

高山先生のパワーポイントの中に「多文化ソーシャルワーク」という、日本福祉大学の石河久美子先生のご紹介がありました。石河先生の著書で、多文化ソーシャルワークという、英語ではマルチカルチュラルソーシャルワークですが、アメリカや北米などの国々では色々な文化があるから多様であると。そのような多様な文化を背景とするクライアントに対して、ソーシャルワークの理論を考えていかなければならないと書かれた論文を読んだことがあるのですが、日本にそれを紹介するときに、「多文化ソーシャルワーク」という言葉で説明すると、なかなか受け入れがたいだろうと思いま

す。

ですので、石河先生は異文化間ソーシャルワーク、英語ではインターカルチュラルソーシャルワークと書かれていたと思います。実際、全米ソーシャルワーカー協会のエンサイクロペディアなどを見ていると、多文化ソーシャルワーク、異文化間ソーシャルワーク、色々な表現で書かれています。そういったことだと私は理解いたしました。

では、松岡先生、続いてご質問ございますか。

○松岡 はい、ありがとうございます。次に、カルチュラルコンピテンスに関連しての質問になります。先程、高山先生から皆様に対して「同じ文化に属している人から支援を受けたいですか」という問いかけをいただいている、やはり同じ文化にいる人たちにサポートしてもらったほうが安心できるみたいな反応があったのではないかなと思います。

そこからの延長で考えると、ろう者のソーシャルワーカーがろう者を支援していくというのが一番望ましいという話になってくると思いますが、その場合は、カルチュラルコンピテンスということ考えた場合に、ろう者の方が、ろう文化がわかっている方がろう文化の人を支援していくというならば、モノカルチャーな支援であり、逆に他のカルチャーは必要がないので、カルチュラルコンピテンスという概念自体が成り立たないですね。そういう矛盾みたいな面を少し感じました。

○高山 当然ろう者に対する支援をする時に、ろう者だけで解決できる部分ではないと思います。「ゆりかごから墓場まで」という言葉がありますように、子供から高齢者まで色々な方の支援が必要な中で、ろうと言っても例えば日本国籍を持っていない外国籍のろう者もいます。また、ろう者でも親が聞こえる人もいれば、親もろう者という人もいます。そういう意味では、色々な人を支援するという意味でのその底辺を支援する最低限のベースとなる部分は、一般のソーシャルワーカーと同じ能力が求められると思います。

ですので、例えばソーシャルワーカー自身がろう者だからろう文化を100%しっかり理解しているわけではないですし、ろう者のソーシャルワーカーも聴者のソーシャルワーカーも、きちんと訓練や指導を受けることが求められます。またクライアント自身もソーシャルワーカーにろう者を希望する人もいればそうでない人もいます。大事なのは、選択できる環境があるのかどうかではないかだと思います。

○原 そうですね。デフコミュニティのメンバーシップの話が先程出ましたが、デフコミ

コミュニティだけを見るのではなく、全体のコミュニティを見る必要があると思います。例えば、日本での様子を考えた場合に、デフコミュニティは非常に狭い、小さいものだと思うのですよね。ですから、デフコミュニティのメンバーのソーシャルワーカーではなく、デフコミュニティに属さないソーシャルワーカーに相談支援を受けたいというろう者のクライアントの話を聞いたことがあります。

○松岡 はい。私も実際そう思います。そうなった場合に生じる次の疑問として、実際おっしゃるように、ほとんどのソーシャルワーカーは聞こえる人ですよね。聞こえる人がろう者の人たちを支援していくにあたり、当然ろう者の人たちのカルチャーを知らなければならないという意味で、カルチュラルコンピテンスというものが重要な意味を持ってくるといのはとてもよく理解できます。

そうなった場合、次のような関係が生じます。支援する人はほとんどが聞こえる人、つまり聞こえる文化に属している、一方で支援されるほうが聞こえない文化に属しています。高山先生のスライドの中にラッドの「デフカルチャー」、「コロニアルカルチャー」という言葉がありましたが、常に支援を受ける文化、ちょうど本国と植民地の関係、それは植民地が独立した後も続きますが、前者が援助し、後者は援助される、という関係から見れば、ろう文化とは植民地化された文化という側面を持つのではないかという、そのような関係性をイメージしてしまうのですが、そこはどうでしょうか。

○高山 すみません。もう一度、ご質問の趣旨をお願いします。

○松岡 失礼しました。実質的にソーシャルワーカーはほとんど聞こえる人なので、聞こえるソーシャルワーカーがカルチュラルコンピテンスを身につけて、実際に支援の実践を行っても、少し専門的な用語になりますけれど、要は植民地主義、つまり援助する側とされる側が固定的な関係の中で展開されているに過ぎないのではないかという批判です。そういう批判をもしかしたら皆様が感じられるのかもしれませんが、そこはいかがでしょうか。

○高山 つまり、聴者のソーシャルワーカーでカルチュラルコンピテンスをしっかりと理解していても、植民地主義の繰り返しになるのではないかということですね。それは、ラッドが言っていたことなのですが、ろうコミュニティのメンバーや、ろう者のやり方についての対話を通して、しっかりと聴者のソーシャルワーカーたちがカルチュラルコンピテンスを身につけ、その上で共に考えていくということが大事だということ

とです。

たとえ、ろう者のカルチュラルコンピテンスを身につけたとしても、ろう者の存在をないがしろにしているのであれば、確かにそこに「植民地主義」が生じてくると思います。自身の限界も理解したうえで、ろう者へのソーシャルワークを進めていくことが大事だというラッドの言葉に私も共感しました。

実際これまでに、聞こえるソーシャルワーカーや専門職の人たちが、聴者のソーシャルワーカーとして、どのような支援が良いのか様々な報告をしておられます。ただ、それは聞こえる人たちの特権を使っている例も多いです。聞こえる人の特権というと、良い事例もそうでない事例もありますが、ろう者が支援をするメリットもあるのです。

例えば聞こえる人同士で話し合ったほうが早く解決できることもあります。それは生まれたときから聞こえるという身体的特徴を持って、生まれた時点から「聴者の特権」があるわけですね。「聴者の特権」があることを理解した上で関わりをつくることは大切だと思います。

○松岡 重要な回答をありがとうございました。

お答えに対する私なりの理解を申し上げますと、その方々はほとんどが聞こえるソーシャルワーカーなので、その人たちがカルチュラルコンピテンスを身につけることによって、逆にそのような自分が植民地主義的な対応をしてしまうかもしれないということを常に自覚しておき、そして、必要に応じてピアのろう者のソーシャルワーカーに対応を委ねるなど、そのようなことも含めて柔軟に対応していかなければいけないということも、カルチュラルコンピテンスというものの中に入ってくるという理解をいたしました。

○高山 そうです。それは逆のパターンもありますよね。事実、ろう者のソーシャルワーカーの中で個人的には人工内耳に反対している人も確かにいます。例えば、聞こえる家族から、ろうの子供が生まれて支援をすることになった場合、どのように関係性を家族間でつくっていくのかです。

ろう者のソーシャルワーカーは自分の価値観を置いて、きちんとその家族のことを考えたりできるか、これが逆のパターンであるといえると思います。

○原 私が以前読んだことがある論文を思い出したのですが、今、話題になっているカルチュラルコンピテンスについて、ろう文化や、言語文化的な視点を持つソーシャルワークが必要だという内容でして、ろうの方たちは、聞こえるマジョリティの社会の中

でももちろん生活されているわけですから、ソーシャルワーカーは聴文化とろう文化の両方の文化に精通しておく必要があるのだという役割について、アメリカのワックスが書いたものがありました。

確かに日本では聞こえるソーシャルワーカーがろうの方の相談支援もされているとは思いますが、日本聴覚障害ソーシャルワーカー協会のことを少しお話しさせていただきましたと、ろう者のソーシャルワーカーとして、社会福祉士、精神保健福祉士の資格を取得して活動しておりますし、全国的にはろうあ者相談員の方たちが相談支援を行っているという、そういう実態もございます。

○松岡 先程の原先生のまとめを、私なりに少し強引に引っ張ってくるとすれば、ソーシャルワーカーはろう文化ももちろん学ばないといけないし、当然、聞こえる自分が属している聞こえる人の文化も学んでおかなければいけないということですね。結局両方提供していかなければいけないということですよ。

先程、聞こえる人の文化という、ろう文化の定義を行う上で暗黙の上に提示されている聞こえる人の文化ということが十分まだ研究されていないのではないかなという問題意識も持ってもいいと思います。当然そこもこれからの研究課題として続けていかなければならないと思いました。

○原 では、私からも質問させていただきたいと思います。

以前、高山先生から、アメリカではろう文化（デフカルチャー）という言葉が最近あまり聞かなくなってきたというお話を伺って、へえ、そうなのだと思います。日本では逆に、やっとう文化のことが語られるようになってきている状況です。アメリカではろう文化という言葉があまり語られなくなったというのは、もしかするとろう文化の視点である、ろう者には独自の文化があるのだという考え方がかなり浸透してきたから語られなくなったのでしょうか。その辺を教えていただきたいと思います。

○高山 私なりの理解で、少し認識不足もあるかもしれないですが、確かにアメリカではろう文化という言い方があまり使われなくなっています。理由としては、文化という言葉が抽象的だから、ということもあると思います。実態をあらわしていません。それに対して、ろうコミュニティと言うと、白人のコミュニティや黒人のコミュニティなどありますよね。

そして、そのコミュニティというのは生活という実態をあらわしています。文化もあればルールもあります。白人には白人の手話が、黒人には黒人の手話があります。

日本のろう者の場合も、例えば言語的に手話は同じでも、東京と関西で手話が微妙に違いますね。

ですので、「ろう文化」という言葉は、実態をあらわしていないので、そぐわないのでは、という考えのもと「ろうコミュニティ」という言い方になってきたのではないかと思います。そこで「文化」という見方が変化してきているというように私自身は感じております。

○原 ありがとうございます。

ろうの方たちには独自のろう文化があるという考え方が日本に入ってきたとき「ろう文化宣言」ということで広まったわけですがけれども、なかなか色々な意見がありましたよね。その辺で私個人的にはろう文化という言葉が、もっともっと広まって、本日の高山先生の講演の内容にもありました文化言語的な視点でろうの方たちを認識していくのだというところは凄く大事だなと感じています。

さらに質問させていただきたいのですが、アメリカでろう文化が広がっているということを、色々な論文を読んで理解していたのですが、一般的に本当にろう文化はどこまで知られているのだろうかということが気になりましてある論文を読みました。

それは2012年の論文で、聞こえない人が登場する絵本を抽出して、その中で、聞こえない人が言語文化的に描写されているのか、それとも以前の医学モデル、つまり聞こえないことはだめなのだという見方で描写されているのか、その比較を行なった内容でした。残念ながら絵本の中に登場するのは、医学モデルに基づいた聴覚障害者が多く描かれていたのですね。

ということで、高山先生、個人的なご意見で結構ですので、アメリカの聞こえる人たちは、「ろうの方たちには独自の文化がある」という認識についてはいかがでしょうか。

○高山 アメリカの聞こえる人たちがろう文化をどれぐらい認識しているかということですね。

ご存知のようにアメリカ本土は非常に広いですし、実感としては、大きな都市では、ろう文化や、ろうコミュニティ、手話は自然なものとして受け入れられています。それは、生活をしているろう者の数も多いですし、色々な職種についていますし、手話通訳者もたくさん見る機会があるからです。私のいるギャロデット大学は、ワシントンD. C. にあるのですが、ろうの学生だけで1,300人、教員も含めると2,000人を超えるろう者がいるわけです。言ってみればろう者の村が存在していると言えます。

つまり、その地域ではろう者がいることがごく自然な環境なので、聞こえる人たちから見ても町でろう者を見ることがごくごく自然なわけです。先程お話ししたスターバックスやビール工場もありますし、都会では自然にろう文化の理解が広がりを見せているのですが、その逆の都市部じゃないところは昔ながらの考え方があって、キリスト教会が中心となっているのが特徴です。そこに住むろう者の数も多くありませんので、コミュニティを形成することも難しいです。特にアメリカの中部では、ろう者が独自の文化を有するという点について懐疑的であると思われます。やはりろう者を見る機会や触れる機会、ろう者にかかわる機会が多いのは、都市部のほうですので、その辺で色々と差があると思います。

○原 どうもありがとうございます。具体的なことをご説明いただきましたので、よく分かりました。

○高山 もう一つよろしいですか。アメリカの東海岸や西海岸では、複数の言語で教育を行う学校が多くあり、そういった背景も、ろう文化という概念を受け入れやすい要因の1つとなっていると思います。

○原 はい。よく分かりました。ありがとうございます。

松岡先生、いかがでしょうか。

○松岡 それでは、ソーシャルワーカーにカルチュラルコンピテンスをどのように認識してもらおうかというところが大事なのではないかなと思うのです。アメリカでは、先程、原先生がおっしゃってくださったように、様々な人種、民族、宗教がありますので、ソーシャルワーカーの養成プログラムの中にマルチカルチュラルな点というのを盛り込んでいて当然みたいところがあると思います。そうした事情や社会的な認識もあって、全米ソーシャルワーカー協会がカルチュラルコンピテンスというのは当然身につけていかなければいけないというようなことが生まれてきているのではないかと思います。しかし、実際アメリカでソーシャルワーカーがカルチュラルコンピテンスを身につけているということはあくまでもアメリカの話であって、日本にそれを持ってくるには、少し日本独自の事情というのを考えないといけないところがあると思います。

一つは、日本では文化というと、やはりどうしても民族、人種や宗教のイメージですよ。プラスアルファそこにろう文化であるとか、盲の人たちの文化であるとか、他にも様々にあると思うのですけれども、そういうところにも文化というのが成り立つ

ということ自体が日本人にはピンと来ないところがあると思いますので、そういうことも含めて、日本のソーシャルワーカーの人たちがカルチュラルコンピテンスを身につけていくためには何が必要だと思われませんか。

○原 私も聞きたいなと思いますので、高山先生よろしくお願いします。

○高山 非常に難しい問題ですね。ぜひ2人の先生にお任せしたいぐらいですが。

日本では縁遠い話かもしれませんが、薬物中毒や薬物経験者の人たちも独自の文化があり、ソーシャルワークで関わる際にもカルチュラルコンピテンスは求められます。私の友人のソーシャルワーカーがある薬物経験者のクライアントとソーシャルワークで関わった時の話です。初めてその人に会った際にクライアントから、「先生は薬物経験したことあるのか」と聞かれたそうです。友人は「いやいや、やったことがないです。」と答えました。おそらく皆様もそのように答えると思います。しかし、後になって、果たしてその返答でよかったのかと思い始めたそうです。そのソーシャルワーカーは薬物経験者の文化というものをもちえていなかったので「もしかすると、薬物経験者達の中では、それは単なる質問というよりも挨拶代わりにすぎなかったのではないか」と気づいたわけです。これは、薬物経験者の「文化」に対するカルチュラルコンピテンスが不十分であったことにより起こった事例です。相手からすると薬物をしたことがあるか否かが問題ではなく、そのように声をかけた際に、どのような反応をするのかのほうが重要なのです。薬物と聞くと、いかんせん「良くないものである」というスティグマが頭をもたげてきます。それを相手は試しているわけです。

同様のことは、ろう文化でも見られます。初対面のろう者は、相手に対して「どこの学校を卒業したのか」や「ろうか否か」といったことを聞いてきたりしますよね。

その文化という視点だけではなかなか限界があると思うのですね。宗教や肌の色など、カルチュラルコンピテンスというのは文化以外にも見えないものが非常にたくさんありますし、それは実際日本にもたくさんあるのではないかと思います。そういうふうに置きかえると、色々とヒントがあるのではないかと思います。

○松岡 ありがとうございます。

これは私の考えなのですが、ソーシャルワーカーの養成の中にカルチュラルコンピテンスというのを身につけていってもらうためにどうすればいいかということについては3つの方法があると思うのです。

1つは、ありとあらゆる文化を学びながら身に付けていくという方法です。ろうの文

化も盲の文化も、例えば薬物中毒の人たちの文化も、ありとあらゆる文化を身につけてもらうという方法です。しかしそれは余りにも学ぶことが多すぎて現実的ではないと思います。

2つ目は、あらゆる文化に共通する要素を見つけ出し、その要素を身につけてもらうというものです。これはおそらく高山先生の本日のスライドの中の「文化的理解の5要素」を示したモデルなどがそれに該当するところがあるのではないかなと思います。

最後に、そもそもソーシャルワークのプログラム自体に、わざわざ文化と銘打って盛り込まなくても、ソーシャルワーカーの教育プログラムの色々なところに、そこに繋がるような様々な要素が盛り込まれていくというような、ソーシャルワーク自体をカルチュラルコンピテンスのものとして作り直して、それを学生たちに伝えていくというものです。

先の2つ目の、共通する要素を見つけ出して、それを教育したとして、実際に応用力が身につくかどうかというところはどうしても問われてくるわけで、そこもなかなか難しいなということを考えると、私個人的には一番最後のやり方を日本のソーシャルワーク教育で考えていかないといけないのではないかなと思っています。

最後に、一つお尋ねしたいのは、ソーシャルワーカーがカルチュラルコンピテンスを身につけていかないといけないというお話に関して、いくらソーシャルワーカーがカルチュラルコンピテンスを身につけても、冒頭の地域包括ケアシステムの話ではないですが、地域社会自体がカルチュラルコンピテンスを身につけていないと、実際には難しいところが多いのではないかなと思うのですね。

地域包括ケアシステムのお話をしましたけれども、専門職がいくらマルチなカルチャーのことがわかっているとしても、地域の人たちにそれに対する理解が全くなければ、いくらソーシャルワーカーが頑張っても限界はとても大きいです。地域社会自体のカルチュラルコンピテンスをつくっていかないといけない、そしてそのためには何ができるかということが次の段階として問われてくるのではないかなと思うのですが、アメリカではそういうところは何か議論はされているのでしょうか。

○高山 当然ございます。でも、それを誰がやるのかというところですね。ソーシャルワークの世界ではよく人間関係が大事だと言われていますが、その人間関係が武器になります。そこが医者とは異なる点で、ソーシャルワーカーは、うまくどうやってその人間関係を築いて個人、地域または国などのレベルに合わせていくか。入り方について

では色々ありますが、例えば個人レベルではしっかりとした対応力が求められます。そしてそれが地域にどんどん波及していくと思います。政治は政治の専門家がいますし、しっかりそこで制度として組み立てられれば、その制度から地域に下りていくというパターンもあるでしょう。まずはソーシャルワーカー自身がカルチュラルコンピテンスを習得して、個々の対応をしっかりと、それが地域に広がっていくような動きが大事なのではないかなということですね。ですので、アメリカでも日本でもそうですが、ソーシャルワーカーは非常に忙しい職種の人たちだということは一つ言えます。

○松岡 ありがとうございます。

最後にコメントとして聞いていただけるとありがたいのですが、地域社会の中でカルチュラルコンピテンスを身につけていってもらえる場合には、考えられるパターンとして2つあると思います。1つは、「地域の中で自分たちと違うコミュニティが存在しているとして、それは受け入れましょう、それを尊重しましょう、でも自分は関わりたくありません」というようなあり方です。

もう1つは、「地域の中で異なる人たちが絶えず相互依存しながら、学び合いながら生きて存在していく。その中にはろうの人もいれば盲の人もいれば外国人もいるかもしれないし、色々な人たちが一緒に地域の中で活動している」というあり方です。カルチュラルコンピテンスを地域社会が身につけていった場合にはこの2つが考えられるのではないかなと思うのです。

しかし、現実的にアメリカやヨーロッパの移民排除の動きなどを見ると、ヨーロッパというのは比較的移民に対して寛容であると言われていて、自分たちの地域社会に違う人たちがいるということを受け入れていたのが、移民が増えてお互いに接する機会が多くなると、最近になって突然手のひらを返したかのように、排除したり、移民に出ていけということを始めました。ということは、地域社会が前者のやり方、接していない限りで相手を尊重するという方法でいくと、日本にも同じようなことが当然起こり得るのではないかなと思うのです。そういう意味では、正しい意味でのカルチュラルコンピテンスの学び方もまた私たちは学んでいかないといけないのではないかなと思いました。

○原 貴重なご意見をありがとうございます。

それでは今からは、本日まで出席いただいております皆様方から質問、意見、何でも

結構なのでお受けしたいと思います。高山先生に色々お聞きするととてもいい機会だと思います。

○質問者 本日は貴重な講演をどうもありがとうございました。

私は福祉の資格を持っていますけれども、現在、手話に興味を持っていて、手話サークルでも活動しております。本日、ソーシャルワークという言葉が出たときに、やはり聴覚障害者協会、通訳問題研究会、手話サークルなど、このあたりでも十分ソーシャルワーク的な役割を担っているなというのは感じていて、手話サークルの時は特に自分自身が専門職であるとか資格を持っているとかというのは話さずに、一サークル員として活動させてもらっています。

それはそれでやりがいを感じるのですけれども、その中でまた資格を持っている人間として、その専門性とか専門職のあり方というところで少し悩んだりする場面もあります。その辺、何か色々な考え方とか意見を聞かせて頂けたらと思います。

○高山 つまり、今、悩んでおられるということでしょうか。

○質問者 悩んでいるというか、別に悩まなくてもいいのですが、専門性ということを考えれば、これだけ今、学校で聴覚障害者たちのソーシャルワークが広がっている中で、自分が地域で何ができるかということなのです。当然、職場では聴覚障害者の対応として援助というのはできるかなとは思いますが、一市民として、かつ専門職として地域の中で何ができるのかということです。

○高山 過去に同じような相談がありました。やはり多いのは、ろうコミュニティの中で一緒に活動していて、非常に疲弊しましたという声です。バーンアウト問題ということでしょうね。福祉全体に言えることかもしれませんが、専門職としてずっと活動を続けている人は意外と少なく、途中でリタイヤする人が多いです。

同様に、ろう者と関わる専門職の人も、支援し続けていく中で疲弊して、そこで活動から遠ざかってしまうという方もおられます。これという答えはなかなか言えないのですが、セルフケアは大事ですよ。やはり24時間ずっと専門職であることは非常に難しいです。小集団のコミュニティの問題としてプライバシーが挙げられます。メンバーでありながらも専門職でもあるという二面性を持っているのですよね。それは多数派にはないことです。少数派のマイノリティだからこそ持つ課題なのですね。それを常日頃から念頭に置きながら活動することですね。

24時間自分是对応できるわけではないですし、そのコミュニティ側もそういうことを

理解してもらおうという双方理解が必要です。マイノリティ側は、小集団であるがゆえの難しい問題というのがありますので。すみません。直接的な答えになってないかもしれないですが、そこが大事じゃないかなと思います。

○質問者 ありがとうございます。

○原 では、次の方どうぞ。

○質問者 ご講演ありがとうございました。

私は以前、ろうの重複障害者の作業所で支援員をしていました。ろうの重複障害者というと、ろうコミュニティの中で更に少数派になるわけですね。支援者にはろう者、難聴者、聴者など様々な立場の人がいましたが、やはり意思疎通の部分とかがなかなかうまくいかないときがありました。そして例えば、何か企画立案をして上に出しても、少数派であるがゆえになかなか意見が通らなかつたりすることがありました。

アメリカにもろうの重複障害者に専門的な支援をするソーシャルワーカーがおられるのか。また、そういう機関があるのでしょうか。また、ろうの重複障害者の家族を支援したりするようなどころはありますか。更に、日本で活躍するろうの精神保健福祉士やカウンセラーの方について、どれぐらいの数がおられるのかを教えてくださいです。

○高山 1つ目の質問ですが、アメリカも同じように、ろうコミュニティの中でも重複の障害を持つ方がいまして、その方たちに対する支援というのは非常に遅れています。特にろうと知的の障害を持ち合わせた人の専門的な支援をする機関というのはないのが現状です。そういう方は知的障害の施設に入るのが大半です。

アメリカでは、ろうと精神障害の重複障害者を支援する機関はあります。しかし、日本同様、知的とろうの重複障害者を支援する、また、その重複に対する興味を持つ人がまず少ないというのも課題かと思います。

あと、もう1つの質問で、日本での、ろうの方のソーシャルワーカーの数ですが、ろう者の相談員だけで見ると210人ぐらいはいるはずですが。そのうちの半分がろう者だとしたら、100人ぐらいはろう者になりますね。それプラス、国家資格を持っている社会福祉士などの、ろう者となりますと、おそらく50人から60人ぐらいはいると思います。その中でまたしっかりと専門職としてその仕事に従事している人の数というのはもっと減ります。資格は持っているけれども会社員をしているという人もいます。それがおそらく日本の現状の数字だと思います。

○原 よろしいでしょうか。では次の方どうぞ。

○質問者 貴重なご報告をありがとうございました。私、専門が言語学なものですから、手話言語学とろう者学の関係について少し気になったのですけれども、このろう者学と手話言語学は、少なくともアメリカにおいては別個のものなのか、あるいはろう者学が手話言語学を包摂しているのか、あるいは簡単には説明できない微妙な関係なのかということについてお伺いできればと思います。よろしくお願いいたします。

○高山 アメリカでは、ろう者学と手話言語学ははっきりと別の学問になっています。例えば社会学や文化人類学に近いのがろう者学です。手話言語学は言語学の分野になりますので、全く別になります。

ただ、大学のカリキュラムの中では、経営的にきっちりと区別しているところは少なく、それは小さい大学が多いからです。例えば、ろう者学部の中に手話言語学が入っていて、ところどころ授業に入っていたり、逆に手話言語学の中にろう者学が少し入っていたりするようなどころが多いです。ギャロデットの場合ははっきりと分けられています。

○質問者 ありがとうございました。

○原 では次の方お願いします。

○質問者 本日はありがとうございました。私は3人の子供を持つ主婦です。次女と三女が聴覚に障害があります。今まで聴覚に障害のある方と関わりが正直なかったもので、とにかく言葉とか発音とか、そういうことを勉強させてあげないといけないって思い込んでいました。でも、実際に様々な方のお話をお伺いする中で、障害を引きずるのではなく、バネにして様々な分野で活躍されている方々のお話を聞くと、発音とか言葉よりも先程の「レジリエンス」とか「折れない心」を育てていくことのほうが大事なのではないかなと思うようになりました。

レジリエンスをテーマに、様々な障害を抱えながらも、それをハンデとせず、様々な分野で活躍されている方々の、ろうの方のお話を聞けば聞くほど、つまり、今までは「聞こえる人たちに追いつきなさい」という教育を受けてきて、ずっとしんどかったという話をたくさん聞かせていただく中で、今私がしていることが何か間違っているのではないかなと思うようになってきています。

次女はもう既に人工内耳をしています。でも、人工内耳をしたからといって聴者のようには聞こえるようにはなりません。でも中途半端に聞こえるとなると周りも聞こえ

ることを求めるし、本人も何とか聞こえないとと頑張るのです。でもそれがずっと続くとしんどくなってしまうのではないかなと思っています。三女も重度の難聴なので、人工内耳をするかどうかというところで迷っています。

ただ、周りは家族も手話ができるのは私だけで、その中で支援学校の先生も人工内耳を勧めています。でも、実際ろう者のお母さんの中から、人工内耳をするとやはりデメリットもあって、ゆくゆく色々な影響が出てくるが、それを日本の医療では隠していると教えてもらって、その辺のところを教えていただきたいなと思いました。本当に迷っているの、具体的に教えていただけたらなと思います。

○高山 私が完璧なお答えをできることではないのですが、個人的には反対もしませんし、特に賛成もしません。

ただ、松岡先生がおっしゃったように、イデオロギーということになるとと思います。聞こえる立場からの抑圧や、ろう者という立場からの抑圧の中で色々な情報が混乱している状態で、多分現在お悩みになっているのではないかなと思います。

アメリカでは人工内耳をしている人は、確かに非常に多いです。私の学生でも70%か80%ぐらいは人工内耳を装着しています。ただ、大切なのは親御さんが、人工内耳が要るのか要らないのかを決めるよりも、ろう者のモデルがいて、手話と関わり合える、子供を連れて行く機会を与えることが非常に大事だと思います。

それは子供自身がまだ選べない年齢だからです。例えば2歳、3歳、4歳の子が「ろうの友達に会いに行きたい」と発信することはまずできないですね。

親にとって人工内耳の悩みは大変だとは思いますが、それは二の次だと思います。手話で生きていかせるのか、人工内耳の手術をするのかを長期的に見て、口話ができる人、ろう者、人工内耳をしている人、難聴者、私のような、成人してから手話と出会ったろう者など、色々な人と会える機会を築くことが大事だと思います。そこも親御さんにとって勉強にもなるのかなと思います。そこが私からお願いしたいところですね。

個人的な意見になりましたが、先生はどう思われますか。

○原 実は私は以前、難聴幼児通園施設で働いておりました、言語訓練をやっておりました。言語聴覚士の資格も持っているのですけれども、人工内耳の手術現場に見学で入らせていただいたこともあります。理想論で言いますと、本当はお子さんが自分の将来も考えて、人工内耳の手術をするのかしないのかを自己決定できれば一番いいです

よね。だけど、何が難しい話かといいますと、人工内耳の手術をするのであれば、言語を獲得するためには早い時期にしたほうがよいという考え方がありますので、本当に悩ましいテーマだなと思います。

でも、高山先生もおっしゃられたように、色々な方と出会っていただいて、昔は医学モデル的な考え方の専門職が多かった時代ですけれども、今はそうではなくなってきましたので、色々な考え方とか立場の、それこそ高山先生のような役割モデルであったり、色々な方たちとできるだけ出会っていただいて、色々な情報を入手していただきたいと思います。

ただ、情報がいっぱいだと、そこでまた決めるのが難しいという親御さんの気持ちも凄くよく分かりますので、本当に悩ましいテーマだなとは思います。

松岡先生、いかがですか。

○松岡 どこまでの的を射た回答ができるかちょっとわからないのですが、お話を聞いていると、お子様の聞こえの程度、回復の度合いの問題ももちろんあると思うのですが、同時にお子様が自分がろう者として生きていくのか、難聴者として生きていくのか、あるいは人工内耳装着者として生きていくのかという、ある意味アイデンティティクライシスの問題としても受け止めることが出来るのではないかなと思うのですね。

本日の高山先生のお話を通して、ろう者として生きていくのであれば、というところに一つのモデルが多分示されたのではないかなと思うのです。あえて人工内耳をつけずに手話を使いながら生きてくときに、ご講演で「デフコミュニティカルチャーウエルス」に関する6つの要素が出ていたと思いますが、それら6つを高めていくことで、周囲の圧力に対抗していこうという、それも一つの生き方だと思います。またその難聴者版というのもあり得ると思うのです。難聴の人も同じようなカルチャーウエルス、つまりどれだけ、自身の難聴者としての生活の豊かさを高めていくか、ということと聞こえる人たちの圧力というものに対抗していこうということは十分可能かなと思います。

更に人工内耳装着者という場合ですが、これはまだ十分研究されていませんが、サイボーグって分かりますでしょうか。例えば手足が不自由な人とかが、自分の体を一部サイボーグにしていくことでずいぶん助かる場所が出てくるようになります。しかしそうすると周囲から機械扱い、ロボット扱いされるのです。あるいはまともな体を持っていないと言われる、そういう意味では五体満足の人たちから排除される存在な

のです。人工内耳についてもサイボーグ扱いされる余地は十分にあります。

しかし、そうした人たちには、例えば油を機械の身体に毎晩差さなければいけないとか、電池を交換しなければいけないとか、それも一つの文化ではないでしょうか。人工内耳は人工内耳の文化というものが有り得ると思うのです。それはまだ十分醸成されてないのですけれども、当然、人工内耳のカルチャーというものが、また、作られていくわけですね。それで聞こえる人たちの圧力に対抗していくということは十分可能かなと思いますし、そのためにソーシャルワーカーが何らかのお手伝いができるのではないかなと思いますので、そういうアイデンティティというか、何者として生きていくかということが多分問われているということで、本日のお話を参考にさせていただけたらと思います。

○高山 以前、公衆衛生の問題について読んだ論文で、子供の、例えば0歳から3歳～4歳ぐらいまでのときの、親との会話について記憶がない人が鬱病になる率が高いという内容のものがありました。推測ですけれども、その理由として手話でも、口話でもいいのですが、しっかりと子供とコミュニケーションをとっていたかどうか、子供に合わせたコミュニケーションを親がとれたかどうか、そこで大きな差がでたという発表でした。

今、非常にお子さんにとって大事な時期かもしれませんし、お母さんが色々と不安で悩まれている時期かと思いますが、やはり子供というのは非常に、親が思う以上に親の顔色を見ています。子供は賢いですから、親が怒っているとか機嫌が悪いとかを非常に子供は見抜いていますので、子供さんとできるだけ対話してコミュニケーションをとってあげていただきたいです。

○原 他の方はいかがでしょうか。

○質問者 質問と確認も含めてですが、先程、対談の中で環境が大事というお話があったと思います。その環境づくりのポイントとは何でしょうか。

○高山 松岡先生はネットワークの専門家なので、松岡先生から是非お答えください。

○松岡 ネットワークというのは、要は人との繋がりということですが、たくさんの繋がりがあればあるほど、色々な人から色々なものを得られるということで、サイズの大きなネットワークは良いと言われてはいますが、最近の研究では、繋がれば繋がるほどいいものをもらえるけど、同時に嫌なものももらってしまうということが、当たり前と言えれば当たり前ですがわかってきていますので、やたら広げれば良いという

ものではないということになります。また、広げすぎるとそのネットワークを維持するのが大変なのです。やはり人の繋がりというのは、どうしてもメンテナンスが必要です。2人に対してメンテナンスをするのと、100人に対してメンテナンスをするのと、どちらが大変かということをお考えいただいたらよく分かると思いますが、その人の力量に応じたネットワークのサイズというのがあるのではないかと思います。

私たちは歳をとってくるとネットワークサイズが小さくなっていきますよね。男性は退職後、がたとネットワークが小さくなります。ネットワークが小さくなるともらえるものが減りますので良くないと思いますが、大体歳をとってくると女性でもある程度は減っていきますよね。それはなぜかと言うと、歳をとるとメンテナンスがしんどいからです。

つまり、その人の力量に合ったネットワークというのがやはりあるのではないかと思います。ネットワークありきではなく、自分のネットワークをどういうふうに運営していくか、そこを考えないといけないという話になってきていますので、それは社会環境の問題であると同時に、本人がどうそれを繋げていく力を身につけていくか、それに対して周囲の環境がどう応えていけるかというところが問われているのではないかと思います。答えになりましたでしょうか。

○原 はい、ありがとうございます。

松岡先生からネットワーク理論のご説明をしていただきました。ご質問された方の聞きたいことは、多分聞こえない方々のネットワークについてだと思います。

○高山 これはろう者の場合はどうかという質問も入っていたようなのですが、難しいですね。ご意見をお持ちの方もいらっしゃるかもしれませんが、やはり環境が大事、けれども、きっかけが必要だと思います。何でもそうですがきっかけがないと動かないですね。ポリティカルコレクトネスもそうです。政治的に正しい言葉というの、きっかけがないとそれが広まらない、動かないですね。精神論かもしれませんが、根性を据えてやるということですかね。

答えになってなくてすみません。是非、先程の講演でお示した6つの要素を使って、良いアイデアを得ていただければと思います。

○原 他にはございませんでしょうか。

○質問者 私事ですが、30年前、ギャロデット大学に入るという夢を強く持っていました。ですが、当時はそれが実現できる環境や支援がありませんでした。そして時が過ぎて

いって、その夢はもう諦めてしまいました。

高山さんが15年前から海外留学の支援をされていることを聞いて素晴らしいと思いました。私は歳をとったので、その夢を後進に譲りたいと思いますが、本日の先生のお話を聞いて、たくさんのお土産をいただいたと思っています。素晴らしい内容でした。

「6つの要素」のお話がありましたが、今後の方向性として先生は現在、ソーシャルワークの指導をされているということですが、学生たちが卒業した後、社会の福祉分野で働くことになると思うのですが、その成果（アウトプット）をどう考えているのか教えていただきたいです。

松岡先生のお話で、あらゆる文化、あらゆるコミュニティのお話もありましたけれども、社会福祉が目指していくところは安心して住める社会をつくっていくことだと思います。それを考えて指導されていると思うのですが、どのような成果を期待されているのか教えていただければと思います。

○高山 ご質問ありがとうございます。非常にうれしい質問です。是非、留学事業にお申し込みください。歳は関係ないですから大丈夫です。私もいつ辞めるか分かりませんし、私のいる間に、是非申し込んでください。

成果についてのご質問がありました。これは色々なものがあります。一つは、やはりロールモデルがいるということが大きいですね。ろうの子供に対しては、やはりろうのソーシャルワークを実際に見るということが一番大きな成果だと思います。地域にろうのロールモデルがいる、自分が何か問題にぶつかったときには支援をしてくれる、ひいては、その子供たちが、自分たちも今後そういうふうになっていこうと思うかもしれない。そのようなロールモデルを輩出していくことがとても大事だと思います。

日本でもそのような動きが徐々にできつつあると思います。特にろう学校の先生や、教職につく方も増えていますので、ロールモデルという意味で、10年、20年くらい時間はかかると思うのですが、ろう者としてのロールモデル、また聴者からもモデルになるような学生たちを育てていき輩出することで、自然とネットワークができあがっていくと思います。

○原 他の方、いかがでしょうか。

○質問者 先程、大学の授業の中で、ろう児を持つ両親に対するソーシャルワークの際の対応例を事例として挙げ、ディスカッションさせているというお話がありました。そ

のとき、学生が自分自身の価値観を見つめ直すという作業を通して変わったという点があれば知りたいと思います。

○高山 例は本当にたくさんあります。先程も少し触れましたが、例えば、デフファミリー（親も子もろうというろう者の家族）の中で、手話が当たり前、両親もろうで、人工内耳なんか要らないのではないかという考えを持っている家庭があったとします。そして、そこで育った子供がソーシャルワーカーになるとします。もしかすると、人工内耳を希望する親がクライアントになるかもしれません。そのときに、そのソーシャルワーカーはどう対応するのか。心の中では反対でも、自分の価値観を押しつけることはできませんよね、それが一つの例です。人工内耳をするけれどもろうであることには変わりがないわけです。こういう考えが理解できたというデフファミリーのろう学生もいます。

それから、LGBTの問題もそうですね。様々な考えの人がいますので、やはりディスカッションをすることで、時間はかかりますが理解できてきます。教員が一方的に授業をするわけではありません。資料を読んで学生たちがディスカッションするという形式で行っていますので様々な変化があります。

○原 まだまだディスカッションを続けていきたいところですが、残念ながら終了時間になりました。

いかがでしたでしょうか。色々な話題が出てきましたし、今後考えていかなければいけない課題も見えてきたのではないかと思います。

本日はこれで終了とさせていただきます。どうもありがとうございました。

閉会の辞

川口 聖

○川口 閉会の挨拶を担当します手話言語研究センターの専門技術員の川口と申します。

本日は大変お忙しい中、この関西学院手話言語研究センターの講話会にご参加いただきまして、本当にありがとうございました。3人の登壇者の先生方におかれましては、非常に興味深いお話をしてくださいました。ありがとうございます。

高山先生は、12月9日にアメリカから日本に到着されまして、もうその日に東京でご講演いただき、あくる日の10日と11日の2日間は、本学人間福祉学部の日本手話のクラスでも、それぞれ3コマずつご講演いただきました。更に本日もこのようにご講演いただきました。4日間連続の講演で非常に大変だったと思います。ありがとうございました。皆様、改めまして拍手をお願いいたします。

原先生におかれましては、モデレーターをご担当いただきましてありがとうございました。皆様、拍手をお願いいたします。

それでは、これで閉会にしたいと思います。ありがとうございました。

登壇者紹介（登壇順）

- もりもと いくよ
森本 郁代（関西学院大学法学部教授／手話言語研究センター副長）
- たかやま こうた
高山 亨太（ギャロデット大学ソーシャルワーク学部学科長・助教）
- かわぐち きよし
川口 聖（関西学院大学手話言語研究センター専門技術員）
- まつおか かつひさ
松岡 克尚（関西学院大学人間福祉学部教授／手話言語研究センター研究員）
- はら じゅんこ
原 順子（四天王寺大学人文社会学部人間福祉学科教授）

当報告書は、2018年12月9日東京国際フォーラム、12日関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスで開催された、手話言語研究センター講話会の内容を編集したものである。

手話言語研究センター講話会報告書

2019年3月16日発行

編集・発行 関西学院大学手話言語研究センター

〒662-8501 西宮市上ヶ原一番町1-155

電話 0798-54-7013

FAX 0798-54-7014
